**世阿弥研究会　17年3月19日(金)　振り返りと考察**

目次

一、河村博重先生のお話　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　1～2頁

1)河村能舞台と研究会の今後の予定

2)観世流・京観世と金剛流の歴史

3)次に読むテキストの内容の概略

4)細男についての解説

二、現代語訳『明宿集』(中沢新一『精霊の王』所収)の講読

　　ディスカッション1 (335頁下段9行目～337頁上段末)　　　　　　　　　　　　　　　　　　 3～6頁

 ディスカッション2 (337頁下段1行目～338頁下段10行目) 6～7頁

　　ディスカッション3 (338頁下段11行目～342頁下段8行目)　　　　　　　　　　　　　　　　 7～9頁

　　ディスカッション4 (342頁下段9行目～344頁下段8行目)　　　　　　　　　　　　　　　　 9～10頁

　　ディスカッション5 (344頁下段9行目～346頁下段14行目)　　　　　　　　　　　　　　　 10～11頁

三、感想及び考察　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　 　 11～12頁

参考(参照)文献・資料一覧　　　　　　 　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　 12頁

1. **河村博重先生のお話**

1)河村能舞台と研究会の今後の予定

いつも研究会で使わせて頂いている河村能舞台の楽屋の特徴は色々なところに鏡があることであるが、京都の家屋の特徴で部屋の中央付近の所を閉めることが出来るようになっている。

だから舞台の前などには囃子方の楽屋としてや狂言方の楽屋としてやワキ方の楽屋としても使われることがある。

またアマチュアの人の発表会などの時には女性の方の更衣室としても使用されることもある。

入る時にあった大道具は明日の3月20日(土)に河村能舞台で行われる『皇帝』のものである。この『皇帝』という曲は何十年かに一度位しか行われることがない曲である。

観世会館などの公の施設の場合には道具を作ってもらうこともあるが、河村舞台ではその時に使われる道具は役者が作ることになっている。河村先生はこの中で地謡をされるが、これは滅多に出ることがない地謡である。秦の始皇帝が舞われ、子方が楊貴妃である。

隣の部屋には大道具のパーツごとが置いてあって、明日の舞台ではこれを下の方に持っていく。

そのリハーサルは昨日の3月18日(木)に行われた。

いつも愛犬の新五郎さんを散歩させながら謡を反芻し、シミュレーションをして覚えている。

新五郎さんは元気で、今日も御所へ2回と近くまで散歩に連れて行った。

現在、金春禅竹の『明宿集』をやっているが、これが終わったら金春流太鼓方の先々代の家元である金春國雄先生の書かれた本をやろうと思っている。

その本では非常に科学的に能を勉強されているために、その中から良いところをコピーして今やっている『明宿集』の後でやったら面白いのではないかと考えている。また、今読んでいる『明宿集』もすごく面白い内容になっている。

以前に鎌田先生とモノ学感覚価値研究会の中で、虚白院(竹本邸)で能舞「虹鬼伝説」の舞台をやったことがあった。河村舞台から3分ほど北へ行ったところに、昔、女学院だったところで竹林のすごく立派なところがあり、そこに能舞台もあって隣にはとても綺麗な様子の竹林がある。その場所でモノ学感覚価値研究会の展示会の1つとして鎌田さんのギターで舞ったことがあった。志村ふくみさんとかも来られていて、竹本さんとはそこで知り合って、その場所をある時期からImpact-Hub Kyotoという団体に貸しておられたのだがそのImpact-Hub Kyotoの中心人物が世阿弥研究会のオーナーの浅井さんという方でもあった。現在は一条戻橋の近くにImpact-Hub Kyotoを移転されていて、金春國雄先生の『序・破・急と間のサイエンス』はそこの図書館で発見した。またこの間、観世会館の檜書店で購入したが、韓国や中国の影響を能がいかに受けたかということを書いた本もある。仮面についても同様である。

『白鬚の曲舞』については猿楽師の観阿弥が1375年に今熊野で舞った曲であり、世阿弥は当時12歳で足利義満が32歳の時であった。

河村定期研能会は年に4回行われており、河村博重先生は9月3日(日)に『隅田川』という世阿弥の名曲を舞われる。この『隅田川』という曲は世阿弥の長男、観世元雅(?～1432)の作でもある。

2)観世流・京観世と金剛流の歴史

観世清和さんは本家であるが、家元が東京と京都に分かれているのは江戸時代に一度全国の家元が東京に行ったからであり、能役者は国家公務員であったので他の流派は東京にそのまま残る形になり金剛流の場合には京都にいるから現在の形になった。

野村金剛という分家の金剛流が京都にいるのであり本家が絶えてしまったので親戚筋が宗家に当たるようになった。片山家は家元と親戚筋であり金剛流の先々代の家元の観世左近は片山家から養子に行かれた方でもあった。つまり先々代の片山先生のお兄さんが京都の観世流の家元になられたということになる。また京都の観世については、元々謡だけであった。

3)次に読むテキストの内容の概要

金春國雄先生は今の当主の2代前の方である。

金春國雄先生は同書の中でたとえば、翁というのは西洋でいう白魔術と黒魔術が底辺にあるとか、真行草があり、5つの金春分流についても能従と考えているとか記されている。

この本は河村先生のお父様の河村禎二先生が所蔵されていらした本でもあり、楽屋の空間と橋掛かりが真行草であるとか書かれている。河村能舞台の橋掛かりの形状は短くなっていて観世会観の場合と比べると2/3位になっている。今の橋掛かりは横になっているが、昔の橋掛かりは斜め後ろになっていた。鏡の間は、土地の具合もあって現在は通路と一緒になっている。

 4)細男についての解説

『細男』というのは戦いで命を落とした敵の死者の霊魂を鎮めるための舞いである。

　　　当時には敵の戦死者**(亡霊)**を弔うための舞い**(儀礼)**が執り行われていた。

　　　その敵とは誰を指しているものであるのか。残念ながら春日大社にしか残っていない。

　　　『細男』の中では笛と鼓によるシンプルなメロディの中で白装束に覆面をつけた宮司が舞う。

　　　笛はメロディではなくただ息を吹き出すだけのシンプルなものであって、鼓もまたただポンポンと叩く何ら技巧のないものとなっている。いかにも簡単に見えて誰でも直ぐに出来そうな舞いや演奏であるがそこに凄さがある。

**二、現代語訳『明宿集』(中沢新一『精霊の王』所収)の講読**

**ディスカッション1 (335頁下段9行目～337頁上段末)**

　　この下りでは翁と鬼の関係が語られている。翁に対して鬼というのはどういう位置にあるか

と言ったら柔和と憤怒の2つの側面の一体性をそれぞれ別個に表現しているということになる。

　三即一ということを言ってはいるがそれぞれに形は違っており(天台)密教だけではなく仏教にも仏教本来の三身説というものがある。ここでは「三密」という言い方をしているので天台密教に従っていると考えられるが、如来の身密は仏舎利、如来の口密は経巻、如来の意密は神明としてあらわれているという秘説・秘伝がある。金春流(円満井座)にはその三つが揃って伝承されている。仏舎利と経巻と神明に関しても神の方は翁と鬼の面で表されている。

　ここでいう経巻というのは何の経典のことを表しているのか。法華経のことであろうか。

　このように金春座はずっと守り伝えてくる特別な家柄であるということが述べられている。

　だからこそ、この三者を御供養しなければならず、毎月三宝供養が行われる。

　三宝というと普通は仏法僧のことを指すが、ここではこれらの三密と関わって用いられている。

その日取りに関して毎月1日は「翁」であり15日に「仏」であり28日に「鬼」である。

18日は観音様の命日でもあり縁日となっているのであり、鬼というのも観音様が三十三神に化身して様々な形で現れるということを含意しているのではないのか。

　　この中では28日は荒神の縁日とされているので荒神の縁日と観音様の縁日には繋がりがあり同じであるということをも表しているのではないのか。

観音様の中には馬頭観音というものがあって非常に恐れられている。観音というと慈悲の観音が一般的であるが憤怒の観音もある。その意味では、観音の2面性ということにも繋がってここでは荒神の命日が28日ということが記されている。この3日間の供養をよくよく守らなければならない。

そして特に重要なのは翁への信心でありその翁への信仰を絶対になくしてはならない。

ただただ精進潔斎して翁を敬っていくことが大事である。

これまでずっと翁の神学について述べて来たのでここでも翁の持っている重要性を示している。

金春では毎月1日に翁をお祀りしてご供養するということが述べられている。

金春は能楽における基準となって観世よりも古く一番古い座である。

当時は太陰暦が採用されており御神事もそれに則って考えられていた。

すなわち1日と28日とは1日違いのことを表していたのではなかったか。

1日が新月であったのならば28日は次の新月の前日ということになる。

これは旧暦の時代に書かれているので翁と鬼を連続して祀っていたことにならないのか。

旧暦で考えると28日で終わりなので1日に翁を祀って最後の日に鬼を祀るということになり、翁と

鬼がそこで連続するためにちょうど対になっている感じであって、翁をお祀りしていた日の天気に関

しても晴れの時もあれば嵐の時もあったのではなかったのか。

　15日ということは満月の夜ということになるので、満月の日には仏舎利をお祀りしていたということになる。神様の方は翁と鬼の二面性で現れる。連続してみると観音信仰と翁・鬼が連続している。

前の章を見てみるとそこにも初瀬観音のことが書かれていて、翁の行いと観音様の威力は全く一体であるということが記されている。観音菩薩は三十三の異なる姿に自分を分けて云々とあるが、ここで翁の行いと観音の威力は全く一体であるということを言っている。

観音菩薩の浄土ポタラ山ということがあり、初瀬の下りでは初瀬観音が出て来ている。

また与喜神社という神社がありそこに天神様が祀られていることも記されている。

天神様の現人神もおり観音菩薩を守っているとありこの点で、天神様と観音様とが一体になっているということが示されている。すなわち観音の働きと翁の働きとを同一視している。

そのように翁と鬼のことが為されて28日は観音の縁日であり荒神の命日であると記されてあることも観音信仰と翁鬼信仰とが結び付いているということを示しているので大変興味深い。

この点で十一面観音は水害と関係があるという理解もあるが、この当時の信仰の中では観音様は本当に様々な姿や形で現れると考えられているため、その種類は様々である。十一面観音に対する信仰心がその様々にある観音様の中でもいつの時代にどういう風な形で広がっていったのかということに関しては専門家の研究を踏まえないと何とも言えないのではないのか。

ところで観音様は身に着けていらっしゃるものがおしゃれである。

と言うのも如来の方は身に着けているものが肩掛け一枚であるが、観音様の方はそれに比べてものすごくおしゃれなご様子であり、蓮の花に乗っているとか身に着けているアクセサリーとか様々なものがおしゃれになっている。

また何月の28日は大日如来や不動明王・三宝荒神などの観音様の日ということが決まっていたりもするのではないのか。たとえば、観世音菩薩ならば毎月18日が縁日となり馬頭観音菩薩ならば毎月19日であり、十一面観音菩薩ならば毎月20日が縁日になっているということがある。

その他には、勢至菩薩は毎月23日が縁日であり、文殊菩薩は毎月25日が縁日である。

今の家元の観世清和先生なら「観世音です。」とは言われず、観世流と観音と世阿弥と音阿弥の流れだから観世音だということになり、観世家宗家の場合には歴代の家元でそうである。

　　ところで観世稲荷社ならばあるが、観世観音というのはあるのか。

　　4月25日がGINZA SIX観世能楽堂の初舞台であり、観世三郎太さんが千歳、観世清和さんが翁を舞われる。また翁を素謡の形式で上演する場合には『神歌』と表記するし、謡でも『神歌』がある。



左の写真は、研究会の当日に河村先生から見せて頂いた『神歌』の謡本である。

表紙に描かれている鳥は観世千鳥と言い、観世流の家元で　ある翁の時に使われる面を収める千鳥蒔絵面箱にも同様の千鳥が描かれている。

縦縞の羽の形状が特徴的になっている。

　以前に、京都大学こころの未来研究センターで観世清和さんを招いて講演会を行ったことが2回あるが、その時にも『神歌』をされた。今『神歌』というと四日の式をするのだが、今度の観世の舞台開きの時のように毎日『神歌』が連なることもある。そんな時には初日の式、二日の式、三日の式、四日の式というようにすることもある。

　6月1日(木)・2日(金)の18時から平安神宮で京都薪能2017が行われるが、その時のパンフレットを頼まれて鎌田先生が原稿を書かれておられる。パンフレットは間もなく出来て来ると思われるが、テーマは「神出鬼没」である。「神出鬼没」は能の神髄そのものであり鬼面は翁の二面性を表しているということになっているけれど観世家は鬼を祓う追儺式もやっていたし、鬼には神の憤怒の一面があるという禅竹的な神学上の位置づけと実際の鬼は魔的な力を持っており強い災いをもたらす存在としてあることもあるので、吉田神社が代表的で追儺式として鬼を祓いやる祭りが行われている。

またその鬼を祓いやる時に儀式を司っていたのは観世家である。

翁の時の儀式の中で今は豆まきとかをするが、そこでは必ず炒った豆が使用されている。

豆には魔を滅するという「魔滅」の意味が込められている。

豆を炒らなければならない理由はそのままだと芽が出るからであり、そこに魔が生ずるからであるとされる。このような理由から豆が必要になるのである。

また天河弁財天社などではルーツが鬼であるので「鬼も内」ということもある。

その天河の宮司さんから聞いた話によると、何かを投げて穢れを祓いやる一番古い形はイザナギノミコトが黄泉比良坂において桃の実を投げて黄泉醜女を追い払うというものである。

次に『備前の国風土記』の中では天孫降臨してくる時に土地の神が荒ぶったために米を投げつけて祓いやるというものもある。お米も魔を祓う神聖な力を持っている。これらは『古事記』の書かれた時代のことであるから8世紀にはそういう伝承があったということになる。

桃の実がそれだけ魔を祓う力を持っているという伝承のルーツは中国から来ていると言われているが、米の持つ祓いの力に関しては中国の影響もあるかもしれないけれども日本における信仰の中では米の持つ威力が非常に重要な意味を有している。たとえば米から作ったお神酒には清めの力がある。

神事を行う時にも、色々なところにお神酒を撒く。そうした浄化の儀礼の中でお神酒は必ず用いられている。加えて、正月に縁起物として出される破魔矢や破魔弓**(神迎えのための清めの呪具)**にも同様の清めの力がある。弓を射ることによって悪霊を退散させるということになるが、これはちょっと信仰が別であり、中央アジアや朝鮮半島から来ているシャーマニズムの系統になる。そのため狩猟民族や騎馬民族の系統とも繋がっているのではないかと考えられる。

花咲爺さんに出て来る灰を撒くということはどうなるのか。

その灰とはどういう灰であるのかということが重要になるが、仏舎利の場合にも遺骨なので骨であるのだが、遺灰になっている部分もあると考えられる。

またその場合には、火葬でなければ出来ないことであって、火葬については仏教との関係もある。

元々は土葬であった訳であるし、灰を撒くということは火葬の場合でなければ出来ないことである。

その辺りの事も、実際にどういう風にして始まったのかということが大変興味深い。

他に何かを撒いて清めをする、或いは何かを退散させるというようなことはあるのか。

塩についてはどうか。また、餅についてはどう考えるのか。たとえば住吉大社などで餅を撒いているのはどうなるのか。

その点は、退散させるというよりも棟上式などの神事に際して全国どこでも必ず行われるものであるが、先でも指摘したお米を撒いて穢れを祓うということとも繋がってくる。

その他に、平安神宮ならば毎年2月の節分祭の時に大儺之儀が行われているが、その際の矛と盾を打ち鳴らして「鬼やろう」と叫び邪気を祓うことも該当するのではないのか。

それは追儺式を再現したものであるが、吉田神社などの神事と通じるところがあるのかもしれないけれど平安神宮の方が新しい神社であるので、新たにそれを復興させながら加えたということであろう。その際に用いられている面に関しては四角い形状をした面になっている。

中国の方でも四角い面が用いられているので、これも中国の方から入って来たものであると考えられる。その他に五芒星とかもあり、五芒星というのはどこかの地方の尼が自分で書いてお清めをされたところ、穢れが祓われて元に戻るという効果があったところに起源があることが知られている。

**ディスカッション2 (337頁下段初～338頁下段10行)**

 この下りでは、まず太秦寺のこと(現在の広隆寺)に関する記述がある。広隆寺には秦河勝が造ったとされる弥勒がある。当時は弥勒信仰が盛んであり、本文では観音信仰になっているが現在は広隆寺の国宝にもなっている弥勒菩薩半跏思惟像がある。この弥勒菩薩半跏思惟像は赤松で造られており韓国の材質であるということが調査によって明らかになっている。

　秦氏は渡来系だと言われているのでこの信仰を朝鮮半島から持って来たという可能性もある。

　初期の仏像は石仏であり造り手の技術は石仏であれ木仏であれ全て朝鮮半島の方から伝来して来たものであるから蘇我氏の後で秦氏が重要になる。蘇我氏は蘇我入鹿、蘇我蝦夷、蘇我馬子などは物部氏の後を受けて宮中の仏教的なものを担っていくが、蘇我入鹿が暗殺され、その後で蘇我氏は勢力を失っていくことになった。そしてその勢力を失った蘇我氏に代わって台頭して来たのが中臣氏であった。

　大化の改新の時に中大兄皇子(後の天智天皇)と中臣鎌足らが蘇我入鹿を暗殺し蘇我氏宗家を打ち滅ぼしている。そこで日本の律令体制の極みが始まっていった。そしてその律令体制の中に神仏を位置付けていく訳であるが、天智天皇の崩御後には壬申の乱が起こり天武天皇の御治世となる。

　天武天皇は道教も取り入れながら、日本の祭祀に関し神道と道教のようなものを結び付けながら整理していかれた。そこには仏教も入ってはいるが道教的な思考も多分に入っているということも明らかになって来ている。ちょうどその時期に聖徳太子のブレーンであった秦河勝の流れがあり、蘇我氏が前面に立って政治を行うようになり、ついには中臣氏へと移り変わっていくことになった。

次に藤原氏が前面に立って政治を行うようになった時には、藤原氏と手を組んだ渡来系の民族が出て来ることになりそれが秦氏であった。そのために秦氏は殆ど藤原氏と一体化しており、藤原の家来のような位置にあり平安京の昔の御所の辺りも秦河勝の邸宅であったと言われている。

藤原不比等の母は秦氏であり藤原氏と秦氏は婚姻関係にあったので藤原氏の中に秦氏の血が入り込んでいたので奈良時代から平安時代の初期にかけて藤原氏はかなり重要なパートナーシップを持っていた。

春日大社は藤原の神社であるし、興福寺は藤原の菩提寺であるし多武峰も中臣鎌足を祀っていたので全て藤原系であると世阿弥も言っていることを再び記してある。

金春の元々の出寺であったのは大和郡山にある真楽寺であるがその隣は春日神社である。

そういう意味でも春日の信仰と秦の関係が非常に重要であったということがずっと伝わり現在に至る。

そのために秦河勝と翁に関することや秦始皇帝のことや前世に関することを書いている。

また、中国から髑髏を運んで来たのか、それとも骸骨が自ら飛来して来たのかというようなことが書かれていることも興味深い。中島というのは三柱鳥居のある木嶋神社のことを表している。

境内の元糺池には三柱鳥居があり非常に珍しい形をしており秦氏が朝鮮半島から色々な文化を伝えたという伝説もあるくらいで複雑になっている。ここでは太秦寺(広隆寺)と大避神社のことが記されてあるが、世阿弥『風姿花伝』の中の秦河勝が壺に入って流れ着いている場面や聖徳太子が亡くなった後に兵庫県赤穂市の方に流されていって祟り神となり大避明神として祀られた場面なども想起したい。また大避明神をお祀りする神社は京都にもあり右京区太秦にある大酒神社である。

それを踏まえて世阿弥が作ったとされる曲もあり、それが『鵺』という曲である。源頼政が鵺を退治するという曲であるが、退治された鵺が河勝であったということではなく、河勝が壺に乗ってやって来たとかそういうことを作品のルーツとして作ったとされている。その場面は実際の能の最初のところにあって、棒を一本持って立っているのが流されてうつぼ舟に乗ってやって来たということであり、勝った方の源頼政と敗れた鵺の亡霊の両方を演じる。

この曲は、以上のような事柄を踏まえた上での変化球の作品であったということになる。これは天野文雄氏や渡邊守章氏の見解でもあるが、2月に春秋座で『鵺』の発表会があり、その時の座談会でそういう話を伺った。

　桂宮院は太秦の広隆寺に本堂がある広隆寺の奥の院である。

　太秦寺の西の方へ少し行った所に桂宮院という霊場があり『古今和歌集』には「かつらのみや(桂の宮)」として歌われていた。その桂の宮というのはどういう意味であるのか。なぜ桂の宮と言われるようになったのか。秦氏の家紋は葵蔓であるので秦氏の家は「かつら(桂)」という意味合いを持っている。

加えて蔓の木は固いのが特徴である。

　桂宮院には河勝の御霊の垂迹と神として現れた大避大明神がいらっしゃる。

　それが桂の宮の桂宮院の本体である。

　その社の前にはお堂があり、そのお堂は聖徳太子が作ったものとされていて、本尊は太子が作った如意輪観音である。このようにこの時代の色々な神秘的な伝承が翁に結び付き、聖徳太子は観音信仰であったがその聖徳太子も翁であり秦河勝も翁であり秦始皇帝も翁である。このようにすべてを何が何でも翁に結び付けるというのが禅竹の論法でまさに翁曼荼羅である。

**ディスカッション3 (338頁下段11行～342頁下段8行)**

　ここはとても長いところであるが、禅竹が言わんとしていることは非常に単純で「全てが翁ですよ」ということが彼の公理であるので、あらゆるものを翁に結び付けて翁の功徳を説いている。

　ここで面白いのは春日明神が翁と御一体であるということや先の藤原氏が秦氏とどういう繋がりがあるかということなどもあったが、春日の役割というのは天皇家の補佐であり、輔弼であるということである。天照大御神の御傍にいて天児屋命や一殿の建御雷神、二殿の伊波比主神などの神々には天照大御神の国譲りであるとか神事を補佐する役割があった。

　その上で翁と春日明神の関係についての言及があり、禅竹の独創的な創作が入っている。

　彼はアナグラム(字謎)が大好きで春日の春を分解すると「二＋大日と日」になり2つの大日という意味を春日が持っており、そこから金春になってくる。それまで円満井と言われていたものがなぜ金春かというと金春は春日という文字へと続いていくということがあるからである。

　「春」という文字を分解していくと「二＋大＋日」になるので金剛界と胎蔵界とを繋いでいるという含意を持っているということになる。また両部曼荼羅である。神であり仏であり金剛界と胎蔵界の憤怒如来の所では、憤怒と柔和の両面性を含んでおり荒魂と和魂の両面性を含んでいるということも述べられていた。そういうものを全て吸収していることになる。このような論理で春日と金春とを結び付けていった存在こそが翁である。春日大社の信仰は4社に対してあるので大和猿楽も4座あり、大和猿楽の4座は十二大寺や多武峰において10月10日～10月16日にかけて維摩八講会などが行われる際に大和猿楽4座が重要な勤めをしている。この点に関連して、世阿弥の『申楽談義』や『風姿花伝』の中にも同様の記述がある。また多武峰は大職官藤原鎌足公を祭神としてお祀りする神社である。鎌足公のお墓は最初、大阪と京都の間の辺りに作られていたのを、遣唐使として中国に渡っていた長男の定慧が戻ってきて多武峰に墓を移された**(十三重塔)**。なお神仏分離以前には多武峯妙楽寺と呼ばれていた。

　このようにして「円満井」というのは一族が長らく暮らしていた土地に由来する名前であったが、それが「金春」へと変わっていった。そのために自分の家の家柄も全てが春日と結び付きを有していることを述べており、春日明神の信仰と翁の信仰と金春の家の技が全て春日と結び付いているということを説いている。これは金春禅竹の何でも結び付けるという得意な技でもある。

　ここに出てきた多武峰というのが観阿弥と世阿弥を生んだ能のルーツであって、2012年から2016年にかけて現在の家元の大倉流が「談山能」を奉納された。その中では代々伝わっているのかまで分からないけれど大きな摩多羅神面を掛けて観世清和先生とか梅若六郎先生とかが舞っておられた。

　その近くに鼓の里という所もあり、そこから見つかった鼓と大倉流に伝わっている鼓とは兄弟の関係に当たっている。一方では鼓の里から出た鼓が大倉流に行って代々受け継がれていっており、他方では鼓の里から出た鼓が資料館に保存されていて、当日にはその展示されていた方の鼓を使って翁を打ったということになる。大倉流小鼓方十六世宗家の大倉源次郎先生は大倉正之助先生の弟にあたり笛の大倉雲龍先生のお兄さんである。源次郎さんの鼓はとても素晴らしく、現在の能楽界では当代一ではないか。

　大鼓の方では、現在、関西では石井流大鼓方の河村大先生がNo.1の先生であり、関東では葛野流大鼓方亀井忠雄先生やその息子さんの亀井広忠先生も素晴らしい。大倉正之助先生は太鼓方でも少しタイプが違っていて「気迫の正之助」とも言われていて、ソロでもされるし色んなジョイントもされている。

亀井というと太鼓も亀井ではないか。

　人間国宝の亀井忠雄先生のお父さんがある能を打っている時に舞台でお亡くなりになられた。

　その時の後見が今の亀井忠雄先生であったので、舞台への取り組み方(気迫)が違っている。

　だから一期一会のつもりで舞台を作っていらっしゃるので、新作能で忠雄先生が打つ時には誰よりもよく全部覚えておられる。

　亀井忠雄先生は1941年生まれであるから現在は76歳くらいであり、たとえば梅若六郎先生が石牟礼道子氏の作った「不知火」の場所で薪能を舞われた時に、その日は台風の影響もあり、前日まで出来るかどうか分からなかったところ何とかできた時に亀井忠雄先生が大鼓を打たれておられた。また六郎先生はご自身で「僕は雨男だ。」とおっしゃっておられたりもする。

　その他、テキストの中で三三九頁の6行目にある「毎月二月五日」となっているの所が「毎年」の誤植になっているだろうこともある。また春日大社の四社において毎年二月五日に能の「翁」を舞わせるのはかつては確かにあったのであろうが、現在どうなっているのかまでは分からない。

　春日の信仰は四殿の武甕槌神、経津主神、天児屋命、比売神と若宮さんがあり天忍雲根命が入ったと言われている。山折哲雄先生は過日の朝日新聞に春日若宮信仰は実は若宮さんが最も古いのではないのか、地主神ではないのかということを書かれておられた。

　若宮信仰というのは鎌倉時代になる前の院政期の1134年、1135年の頃に現れて来て、おん祭りは1135年、1136年頃に出来てくる。

　春日大社は若宮さんを祀り、若宮さんは蛇の姿になって現れ出て来るというのが特徴であり、ところてんのような中から蛇の姿になって現れたので、ちゃんとお祀りするようになった。若宮さんを祀るようになってから、都市に様々な災いが起こるようになったので毎年欠かさずにおん祭りを行うようになった。山折さんの説によれば、それは古い地主神が若宮さんとなって現れ出たのだということになっていたが、春日の信仰も分かりにくい部分があって単純ではないのでどう考えられるのだろうか。東岩倉を見てから、驚いてしまって、なぜ春日山というのかということに関しても何が何だか分からなくなってしまった。もちろん世阿弥からすれば、真東の方角に当たるので東の信仰であり三輪は北東の方角で鬼門に当たるのだが、その三輪山に該当するような意味合いを持っていたことは事実である。

　三輪山の方も太陽が昇ってくる方角で鬼門であるので、藤原京にも夏至の方角から太陽が昇って来ることがあった。その一つ上が比叡山であるが、夏至の時にはちょうど比叡山の方角から太陽が昇って来るように見える。この辺りからだと夏至の方角を見ると比叡山から太陽が上って来ているように見えるのではないか。春日信仰の方では春日曼荼羅の中に描かれているのは月だけであって太陽神が出て来ていない。春日山の上に月が出ているが太陽は出て来ていないということもある。

　その点に関しては、そもそも天皇が太陽を象徴するものであったのだし、藤原不比等だけは例外であるが、春日の信仰の背景や起こりの中に太陽信仰もあったはずである。

さらに、実際の図面の上で奈良の平城京と京都の平安京という南北朝を想定して考えてみた上で実際の方位や方角を当てはめて考えてみると世阿弥(1363年～1443年)や禅竹(1405年～1471年)が活躍していた当時の状況についてさらに深く考察を進めることも出来ると考えられる。

　ところで、春日の地においてはなぜあれ程に鹿が神の使いとして崇められていたのか。

　それは元々鹿がいたのであろうし茨城県から武甕槌命が白鹿に乗ってやって来たとされることから鹿を神の使いとすると考えられている。

　鎌田先生が観世清和先生と松岡心平先生と対談をされた際には、『春日龍神』の中で中臣時風・秀行という人物が出て来た。その人物が鹿と共にやって来たということが述べられていて、春日龍神では明恵上人が出て来て、明恵上人が唐に渡るのを押しとどめ釈迦の世界を見せてあげようと言って春日龍神が眷属を引き連れて壮大な舞を披露するという曲があり、そこに鹿が出て来ていた。

　鹿も膝をついて夢枕ということでもある。

　このように、春日信仰が極めて重要な意味合いを持っていることは間違いない。

**ディスカッション4 (342頁下段9行目～344頁下段8行目)**

　金春禅竹の『明宿集』が書かれたのは寛正六年(1465年)前後とされているので、本文にある春日信仰というのは現在の春日大社でもあるけれども中世の春日信仰になっている。

　展示されていた春日宮曼荼羅については所有者が京都の方になっていたものが多かった。

　博物館等から持って来たようなものもあれば個人所有のものも結構あり、家にもあるというようなものもあった。そしてほとんど皆もう信仰をしていないからということもあった。

　春日明神と翁の神様で翁信仰と春日信仰に似たような広がり方を感じるが、春日講との関係などはどうなっているのか。

　春日信仰という程のものがどういう風な形であったのかということははっきりしないが、能は翁の信仰や神学を持っていて、その翁の信仰を明確に説いたのが世阿弥であり、それを最も神学的に解釈して形而上学としたのが金春禅竹であったということは指摘することが出来る。

　金春禅竹は全てのものやありとあらゆるものや森羅万象が翁であると考えているので、何が何でも全てを翁に結び付けている訳である。たとえば阿弥陀如来、観世音菩薩も皆翁であると捉えているとか、法華経とも一体であるとか仏・菩薩・諸天・善神・羅刹・阿難・舎利弗など経典や経文の一字一句も翁であるとか言って翁の功徳を説いている。

　343頁の下段最後の所から、如来の意密は春日明神に他ならず『法華経』でもあり、「仏心宗」のおおもとであり「神信宗」でもあることが述べられている。

　その上で、とにかく翁を信じなさい、翁の力で全てのものを救済しようということを書いている。

　全てを読んでいてもまるで金太郎飴のように翁しか出て来ないし、葵の御紋のように翁紋が出て来る。

　だから理論としては深みがない。全部が翁に通じているという我田引水の極みであるので辟易してくるところもあるが、それ位に理論を展開して結び付けたのは禅竹以外にはいないのでそこに重要な意義があることが理解される。

次に翁は住吉明神であるということになる。前の所にも住吉の事は出て来ているが、翁と住吉との関係は『高砂』にも出て来ている。

**ディスカッション5 (344頁下段9行目～346頁下段14行目)**

　続いては住吉明神が翁とどう繋がるのかということが語られる。

　すなわち、住吉明神は元々翁とご一体であって和歌を守護されておられる。

　猿楽というのは歌舞・歌・舞いによって構成されているが、この歌の部分に該当してくる。

　印度におけるヴェーダ・中国の漢詩・日本の和歌には皆共通するものがあり、その心は『古今和歌集』の『真名序』や『仮名序』の中でも語られている。

　中国の場合には『毛詩』の序文に詩は志であるとか、心の中に宿っている状態では志であるが志が言葉に表現された時に詩となるとあり、それと同様のものは『古今和歌集』の「かな序」の中にあり、やまと歌は人の心を種として多様な言葉の葉を芽吹かせるのであると書かれている。これは同じことを別な言葉でそれぞれに書いているものである。

　『古今和歌集』の中にある日本独自のものというのは「生きとし生けるもの、いづれか、歌を詠まざりける」というところであり、生きているものは皆全てが歌を歌っているというところである。

　またその中で住吉明神に関わるものは、五七五七七の句を繋ぎながら微妙な感覚の震えが含蓄された曲の態となっていき、舞いも鬼の舞いとか天女の舞いとか武士・軍体の舞いとかを表現してそこに幽玄というものを見出していく。その際に歌が生命線であるということが言われていて、その人物は一生世俗を脱した幽玄風を実現した芸人となることが出来る。

　そして住吉明神の名月の相撲会というお祭りが9月13日に行われていた。その13日は虚空蔵菩薩の縁日でもある。そうした月や星の力を得てか霊夢を見、そこで翁の姿を見た。住吉明神も翁であるが、虚空蔵菩薩もまた翁の秘密の姿を表している。虚空蔵菩薩とは全てが虚空であるが、0％で100％であり、不生不滅であり不増不減であり増えることも減ることもない。そのような存在と無との100％と0％の西田幾多郎先生の言う「絶対矛盾的自己同一」の存在が翁や虚空蔵菩薩として現れ出て来ている。

　全てが翁であるので、何とでも言いくるめることが出来るのであるが、ここまで言ってもらうと、そうですか、もう言うことはありません、という感じにさえなる。ここまで翁の大風呂敷を広げた人物は禅竹をおいて他にいないのではないか。空海も相当大風呂敷な人物であるけれどもここまでねちっこくはないし、この金春禅竹の大風呂敷は全く感心するというか少し飽きれるというか、蛇のようにねちねちしていると言っても過言ではないのではないか。

　鎌田先生がこれまでに読まれた日本の思想家の中で金春禅竹に似ている人物は平田篤胤である。彼も我田引水の得意な人物であり、あらゆるものを結び付けて論を展開している。この点、本居宣長の場合には出来るだけ客観的に見ていこうとしていたが、平田篤胤は当に自分の功利みたいな感じて結び付けていく。そういう平田篤胤の形而上学的な思考に似ているものが金春禅竹にはある。

　そのように金春禅竹の哲学や思想の中には過剰な側面があることは事実であると考えられるが、この時代にはその過剰さが必要であった。時代的にも南北朝の時代が終わり能が根付いていって、能の中で世阿弥の流派が衰えていく、しかし自分たちの流派を隆盛させていかなければいけないという要請を持ちながら金春の家の特質や神聖さをより強調していくことになった。

　禅竹の中には、世阿弥の後でポスト世阿弥を自分が担ってその先に行かなければならないという強い意気込みがあったと思われる。『明宿集』の書かれたのは世阿弥の死後であるので、この本にはそういう意味合いが込められていたと考えることが出来る。



**三、感想および考察**

1. 今回の研究会ではテキストの『明宿集』の講読を進めながら、同時に能のワザの伝承の形という側面から現在の能の五流派についてそのルーツを振り返り、翁信仰の神髄について理解を深めていくと共に春日信仰との関係から理解を深め、金春禅竹が翁信仰に関して書き残そうとした教えや彼にそうさせた歴史的な要請とはどういうことであったのかさらに考えて来ることが出来た。
2. また翁信仰の教えは現実にどのような形で様々な種類の神事や能の曲の中に現れているのかということに関する話題は大変興味深く、研究会の後日には、南北朝や足利幕府の時期に当時の時代背景と要請なども受けて確立をされてきた信仰であったのだということなどを文献資料から確認して来ることも出来た。
3. 河村先生のお話からは能楽師の先生が普段から舞台の当日に向けてどのように稽古をされており、身心の調整をされていらっしゃるのかしっかりと伝えて頂くことができ大変参考になった。
4. また河村定期研能会では能の見方や読み方に関する解説もして頂きながらそれぞれの先生方の演能の様子を見させて頂くことが出来これまで世阿弥研究会の中で学んで来たことや読み込んで来たことがどのように舞台の上で表現されていくのかしっかりと理解を進めることが出来た。
5. 第321回オムロン文化フォーラム「歌と宗教－歌うことそして祈ること」の中では日本における歌の歴史や歌の文化について理解を深めて来ることが出来、大悲が癒えて来る過程の中で歌が生まれて来たのだということが大変興味深かった。
6. とりわけ中世の時代において日本の歌の文化がどのような状況の中から生み出されて来たのかということや、当時と現代の時代状況を比較して考えてみた時の歌の持つ意味や社会的な役割についてまでしっかりと伝えて頂くことが出来、能楽の伝承との関わりについてもそうした視点からお話をお伺いすることが出来た。

**参考(参照)文献・資料一覧**

1. 中沢新一著『精霊の王』講談社 2003, pp.326～335.
2. 金春國雄著『能への誘い―序破急と間のサイエンス』淡交社 1980,pp.12～41.
3. 西野春雄,羽田昶編代『能・狂言事典』平凡社 1987, pp.41-42、pp.60-61、pp.234～235.
4. 丸岡明編『能楽鑑賞事典』河出書房新社1961, pp.144-145、pp.186-187、 pp.223-224、pp.227-228、pp.255-257、pp309-311.
5. 小林責, 西哲生, 羽田昶著『能楽大事典』筑摩書房2012, pp.119-120,pp.183-184, p.206, p.322,pp.469-470.
6. 小林保治,森田拾史郎『能・狂言図典』小学館1999, pp.94-100.
7. 大西宏志 研究プロジェクト「モノと感覚・価値に関する基盤研究」

「こころの未来vol.8」,京都大学こころの未来研究センター,2012,p.49.

1. 観世清和＋吉川左紀子＋鎌田東二「観世清和氏インタビュー 能―鎮魂の芸術」

「こころの未来vol.8」,京都大学こころの未来研究センター,2012,pp.2～12.

1. 「（都ものがたり）山折哲雄が歩いた春日大社　南と西と、社殿の向きと共存の形」朝日新聞夕刊17年3月16日,p.3.
2. 東京藝術大学大学美術館[ほか]編集『興福寺国宝展:鎌倉復興期のみほとけ』図録, 朝日新聞社2004,pp.85-104.
3. 奈良国立博物館編集『おん祭と春日信仰の美術:特別陳列』奈良国立博物館2010,pp.5-19,pp.61-66,pp.68-73.